

し、当時の日本円で五百三十円を受領しました。「これで戦争は終わったぞ、明日からは祖国再建にがんばるぞ、戦死した戦友の分までがんばるぞ」と誓いました。

今でもインパール作戦で戦死した人々の姿が目から離れません。

戦人^{いくさびと} 尊き生命 投げ捨て

祖国を護る 心美わし

ビルマ西部戦線死闘記

愛媛県 福田 秀吉

私は農家の五男二女の長男として、大正十（一九二一）年七月十五日に生まれました。長ずるにつれ、世の中は軍国主義一辺倒となり、「日本男児と生まれなば一度は軍隊生活を経験せねば一人前の男になれん」と、「なるなら一刻も早く軍人にならなきゃ」と役場に出掛け、徴兵検査は昭和

十六（一九四一）年のところを現役志願を願い出て、昭和十四年末の徴兵検査を受けました。

結果は見事に甲種合格となりました。私が兵隊に入っても男の手は四人もおり、留守宅には何も心配はありませんでした。

志願に当たって兵科の志望は馬の扱いに馴れていたのに加え、輜重隊の下士官の乗馬姿と軍刀を佩刀できるのが憧れの的だったので輜重隊を希望しました。

昭和十五年四月十日、善通寺の輜重兵第十一連隊第二中隊に入隊しました。中隊長は宮地信敏中尉、第二内務班班長川添武伍長でした。それから一年六カ月の間は厳しい訓練に明け暮れ、たくましい帝国軍人に生長しました。

昭和十六年九月、第五十五師団の歩兵第百十二連隊に転属となり、丸亀に移動し、歩兵隊付の行李隊になりました。

昭和十六年十月、坂出港から輸送船団で出港、

南方の仏領インドシナの「ハイフォン」に無事上陸しました。これが有名な仏印進駐であり、太平洋戦争の火付け役になるとは夢にも思いませんでした。しかし間もなく十二月八日には日米開戦となり、我が連隊がタイ国を通過してビルマに進出したのが昭和十七年一月二日でした。

目標はビルマ南部の要衝モールメンでした。途中コーカレーまでは険しい山地が続き、密林が空を覆っていました。ジャングルの切れ目で一息ついたのが一月二十一日、一月二十四日には連隊はコーカレーに入りました。

ここまでに幾つかの敵陣がありました。敵は先遣隊の進撃に目を奪われ、結果的に我が連隊の攻撃が虚を突いたこととなりました。

一月三十日、モールメン総攻撃下令され、翌三十一日にはモールメンを占領。三月三十日、トングー攻略。各部隊長は作戦に先立ち靴・靴下・靴油の補給を訴えました。

対する敵は重慶軍三千人で、煉瓦壁を利用した

複郭陣地で頑強に抵抗しました。五日目の三十日やつと攻略、トングー市は廃虚と化しました。この戦闘では、シンガポール攻略戦に使用した二四センチ重砲が威力を発揮しました。

昭和十七年六月、全ビルマを制圧。師団は各要衝の警備に着きました。同年十二月、英印軍は西部の印度・ビルマ国境で反撃を開始しました。多数の戦車と重砲兵連隊を伴う一個師半の強力なる部隊で、アキャブ奪回を狙ってきました。

第五十五師団はこれに反撃を加え、大損害を与え、国境線の北に駆逐したのが第一次アキャブ会戦で、その勝利は故国日本でも歓迎されました。

昭和十九年二月四日、印緬国境アキャブで第五十五師団の陽動作戦が開始されました。

これに先立つ昭和十八年十月二十三日、第五十五師団長が悪名高い中将に替わったのです。中将は、気性が激しく、部下に対して狂気じみた態度

で有名な悪將軍である。

部下の歩兵团長は人格者で有名な桜井徳太郎少將でした。隊の称号も「壮」から「楯」に変わりました。

昭和十八年末には、敵は再びアキャブ方面に侵入して来たので、我が軍は作戦開始、一週間分の糧秣を持って出動しました。この作戦は「は号作戦」と称せられました。

マユ半島のブチドンの我が守備隊を攻撃した敵を包囲攻撃する際に、我が軍の半分が楔状に敵陣に突入し、直ちに反転して敵を包囲殲滅する作戦で、これは桜井旅団長の最も得意な戦法で、過去にも大きな戦果を挙げてきたのでした。

初めは成功して敵の包囲を突破して守備隊と合流できましたが、敵の抵抗が戦車、砲で強く、戦鬪が長引いている間に一週間しか持たない糧食が尽き、食料難に落ち入り、補給もままならぬ状況になり苦戦になってきました。僅か十日か十五日間の事ですが私にとって生涯忘れられない戦鬪で

あります。

一日一日と負傷者が続出し、収容も困難になり、殺すか殺されるかの戦鬪を繰り返しながら負傷者を担架に乗せ、敵のいない山地を移動していました。

二月二十三日夜十時頃、敵陣地にピカッと大砲の火が光る。しばらくするとドーン！ ドーン！ と発射音が聞こえると同時に炸裂音が近い。隣の山に敵がいる「静かにせい」真っ暗で進めない。腹は減る。担架を降ろしたその時「グワン！ グワン！」と物凄い炸裂音。「ヤラレタ！ 誰か来てくれ！」との必死の叫び声、その直後私は何か太い棒で思い切り叩かれたような激しい痛みを感じた。

「あっ！ やられた、しまった」と思ったがどうすることもできない。体の上から物凄い力で押し付けられたようで息もつけない。「何くそ！」と頑張った。傍らでは松村上等兵が「班長殿やら

れた!」、あちこちで「助けてくれ!」とうめき声がる。

山の屋根にいて無事だった者は、我先にと谷間めぎして走り出す。まさに阿修羅の惨状です。私も出血のため気が遠くなってきた。もうこれで死ぬのだろうか、何くそ! 死んでたまるか。血で体の下がグジャグジャ濡れているのが判る。生地獄とはこのようなものか、断末魔の声があらでもこちらでも聞こえる。

夜明けが近くなった時、下の方から聞き覚えのある助けの声がる。「助けに来たぞ! 負傷者はいないか!」と呼ぶ声が、だんだん近づいてくる。「オウ! 福田か、お前もやられたか」「よし助けてやる、しっかりせい」山中軍医の声だ。「手当してやるぞ」それもだんだん小さく聞こえる。モーローとした気持ちの中で聞く。ハサミで軍衣袴を切り裂き全裸にされた。ヨーチンを塗って仮ホータイ「ちょうど破傷風の注射が一本残っ

ているのを打ってやる」傷は横腹と右足の踵と右の腰に迫撃砲弾の破片創だ。近くの木の枝で作った担架に伏せて乗せられ、落ちぬように傍らの木のツルで縛られた。一メートル八三センチの身長、八〇キロの体重だから担架から抜け落ちてしまふからだ。

だんだん夜が明けた、付近を見ると物凄い惨状だ。血みどろの死体がゴロゴロしている。昨夜私と話していた機関銃中隊の古川軍曹が倒れている。耳から上の頭半分が千切れて飛んでおり、脳味噌がはみ出ている。即死だ。機関銃班の兵隊が「班長殿、背のう重かったでしょう。外します。らくになつたでしょう」と泣き叫んでいる。

早く山を降りないと、また次の砲撃を喰う。多くの戦死者を山に残し山を下りる。あちらにもこちらにも血みどろの死骸もある。谷間を出て一〇〇メートル行った所に二人血みどろの仰向けの死体がある。同班の大野上等兵だ。まだ息がある。

近くに砲弾の穴がある。肉が千切れてピロピロだ。破片が体に喰い込んでいる。被服ははがれて裸に近い。大野は徳島出身で大工さんだ。出征前に生まれた女の子の写真をいつも皆に見せていた。力の強い生真面目な大野が今は虫の息だ。

「大野しつかりせい」と言っても目を見開いたまままで何とも言わない。皆で介抱したが駄目だった。死体を焼くことも埋めることもできない。もうすぐ敵が来る。「指を切ってやれ」担架兵の上衣を大野にかぶせてやった。

それから一昼夜、部隊と行動をとにした私達負傷者は、宮本徳次郎曹長指揮の下に患者八〇人が後送されることになった。そのあと糧秣と弾薬を持って帰るのが軍曹の任務である。四人の担架兵が一人の患者を担ぐ、合計三二〇人の大部隊である。

ただ南十字星を頼りに真つ暗闇を南へ南へと下った。敵の中を通り味方の所に帰らねばならな

い。宮本曹長は行李長、私は弾薬班長、共に大隊本部付の二人である。暗くなって二、三時間も歩いた時、前方に焚火が見えた。「敵だ」と直感した。こんな所に友軍がいる筈がない。曹長と相談して直進を決めた。日本軍の大部隊がきたので慌てて火も消さず逃げたのだろう。大きな鍋にコーヒーがいっぱい入っている。パンや缶詰が散らばっている。目の前に食糧がある。今まで何にも食べていない、久しぶりに満腹感を味わった。堪能した皆は元気が出てきたようだ。

「サア行くぞ！」と、しかし地理が分からない。敵い、どこを歩いているのかサッパリ判らない。敵の中に入ったら大変だ。東の空がほんのり明るくなった。その時敵の照明弾が上がった。落下傘がついてユックリユックリ下りてくる。周囲が真昼のように明るくなった。担架の列が蟻のように見えた。私の後に続く八〇の担架がハッキリ見えた。「敵襲だあ！」迫撃砲、機関銃がウナリをあげて飛んでくる。無防備の担架隊と見て敵は銃剣

をかざして突っ込んできた。

我々は担架を担ぐために武器は無い。腰のゴボー剣だけだ。皆すべてを捨てて逃げた。私も担架に乗ったまま残された。殺される。しかし重傷の私は担架にくくられたままどうすることもできない。つるを解こうとしたがままならない。あちこちで異様な叫び声がある。一時間程で静かになった。殺された者、捕虜になった者多数いるだろう。私は行列の一番先頭に伏せたまま裸でいたので死んでいると見過ごされたようだ。暑い熱帯の太陽が輝き始めた。

なんとか助かりたい。あの時ばかりは氏神様はじめあらゆる神仏に祈りました。二十三歳でこんな所で死んでたまるか！「ガンバレ！」と自分を励ました望みを捨てなかった。ノドがからからに乾いたが、前夜のコーヒーと食糧が力になっ

たのか我慢できた。苦しみと闘った精神力で助かった。今晚一晚頑張つて、翌日太陽を拜んで日本に向かつて死のうと決意を固めた。

すべてを諦めたその日の夕方、宮本曹長以下数人が助けに来てくれたのです。「どこだ！どこだ！」と来るではありませんか、その時の嬉しさ、「あ、助かった、ああ助かった」。涙が止め度なく流れました。地獄で仏とはこんなことを言うのでしょうか。

「福田！ しっかりせい。助けに来たぞ」と曹長の声。「有難う、有難う」嬉しさいっぱいです。とうとう助かったのです。

それから一晩かかってようやく日本軍の陣地に辿り着きました。山砲隊の小隊のいる所に出たのです。そこで小さな握り飯を頂きました。そのおもしろかったことも終生忘れられません。そして五、六時間かかってやっと野戦病院につきました。

野戦病院とは名ばかりの山の中腹の樹の下です。土の上にゴロ寝です。砲声が聞こえ戦場は間近です。

宮本曹長は再び第一線に帰らねばなりません。別れが辛かった。これが今生の別れになろうとは……「体に気付けて一日も早く部隊に帰ってこい」。虫の知らせか涙の中に握り合った掌の感触が今でもハッキリ残っております。「さよなら、また会おう」。

あとは私一人。赤土の上にはゴロゴロと負傷者。誰に看取られることも無く「衛生兵殿、衛生兵殿」と力無くつぶやくのみ。

軍医、衛生兵の姿は見えない、後で判った事だが炊煙が見つかると爆撃、砲撃の的になるので一山越えた遠方で小さな握り飯を作っていたのだ。薬はヨーチンのみ、傷の手当は数日に一回、傷にヨーチンを塗って傷口の「ウジ虫」を取り除くことが手当のすべてだ。身動きできぬ重傷者の傷口

にはウジ虫が肉を喰い、骨に迫っているむごたらしき。

私の横に寝ていた准尉さんは大腿部と顔とあごをやられウジが湧いている。這い回っている。「衛生兵殿、衛生兵殿」と小さな声で呼んでいる。夕方動かなくなった。元気な頃は当番兵が面倒見てくれたのに、今は赤土の上で果てるとは全く気の毒である。内地では妻子が帰りを待っているだろうに。

朝「輜重隊の馬が来たぞ！ 自分の力で下の谷間に下がる者は夕方までに下がっておれ」と大きな声で衛生兵が叫んでいる。気力を振るって谷間に下がった。輜重隊なら同期の金田軍曹がいる筈だ。金田は昭和十五年四月十日、第二中隊と一緒にに入った戦友だ。「オーイ！ 金田、オーイ！ 金田」と力いっぱい叫んだ。

「お前と同期の福田だ。丸亀に行った福田だ」「オーウ福田か、ヨーシ助けてやる」だった。一頭鞍の付いた馬を呼んで乗せてくれた。「腹減っ

てるやろ！これを喰え」梅干入りの飯をくれた。口に入れていつまでも梅干の種を出さなかった。

昭和三十六年、生き残りの輜重隊の集まりに出て、金田軍曹の戦死を知りました。愛媛県のミヨシ町のお墓にお参りしました。

八〇人の患者と担架隊の二四〇人、計三二〇人のうち何人が生き残ったのか不明ですが、ほとんど全部が死んだらうと思います。

私の命の恩人宮本曹長は、終戦間近の昭和二十七年七月、戦死を遂げられました。誠に残念でなりません。多度津にあるお墓には毎年お参りして「お陰で福田は今も元気に生きておりますが、曹長殿に助けて貰ったお陰です。一人でお淋しいことでしょう、本当にありがとうございます」とお礼を申し上げております。

ビルマ戦線は敗北に終わり、三〇万人の日本軍は終戦時僅か六万人が生き残り、二四万人がビル

マの土となりました。

私の輜重隊でも、内地から連れて行った軍馬は全部栄養失調で死んでしまい、補充に現地の牛等を徴発しましたが、用に立ちませんでしたから、行李班の私らは一人三〇キロの荷物を担がされました。私は弾薬班長でしたが機関銃の弾薬函は二八キロ、小銃函は四五キロの重さで大変でした。ビルマの山中は住民も居ないので現地補給は中国と違って全く無し、動物もドンパチで奥へ逃げ、作戦中口にしたのは蛇三匹のみでした。象もいる筈なのに姿は見えません。ビルマの雨期は五月から十月までで他は乾期、雨一滴ありません。

昭和二十年三月五日、私は病院船「高砂丸」に乗せられ別府に到着、岡山陸軍病院、善通寺陸軍病院と転院、終戦になって丸亀の部隊に帰り、歩けるようになったので復員しました。持ち物には、支給米も無く、軍服を着ただけで復員手当も無く、丸裸で自宅に帰りました。

終戦後今まで八回、ビルマに慰霊巡拝に行きました。恩人宮本曹長戦死の地は治安が悪く、残念ながら行けませんでした。

私達の連隊長・第一二連隊長棚橋大佐は「号作戦」の時、無線機破損のため連絡取れず、独断撤退したのが抗命と見られ、辻参謀に詰問され内地召喚となりました。

戦後進駐軍は連隊のマユ半島ブチドンにおける戦闘を称賛し、詳細を聞こうとして召喚されたことを大佐は戦犯容疑と勘違いし割腹自殺しました。進駐軍は大いに惜しんだとのこと。プチドンの勇戦はGHQの評価を得たのです。

私の体験談を少しでも皆さんに聞いて貰いたく、「テープ」に収めて、あちこちの集会の席上で、私の拙い話を聞いて頂いております。

亡くなった宮本曹長、金田軍曹等戦友の御霊安かれと偲びつつ、生業である農業に励みつつ、地域の皆さんのために少しでも役立とうと思ひ、老

人クラブ等の世話役をやらせて貰っています。

悲惨なり！ ビルマ戦線

兵庫県 戸田 義明

私は天下の名城、姫路城を朝な夕な眺めて育ちました。家族は両親の下に、私が長男で第三人、妹二人の八人家族でした。住居は、第十師団司令部のある市の中心部で、城南に練兵場があり、歩兵第三十九連隊と師団通信第十連隊があり、城北には広い練兵場が、東西南北それぞれ一キロメートルで、北の半分が騎兵第十連隊、野砲兵第十連隊、輜重兵第十連隊がありました。なお工兵隊の第十連隊と歩兵第十連隊は岡山にあり、鳥取、島根の一部を含む歩兵第六十三連隊が第十師団管区でした。

幼少の頃から兵隊さんの軍靴の響きを子守歌のようにして成長しました。練兵場に蛙やトンボを